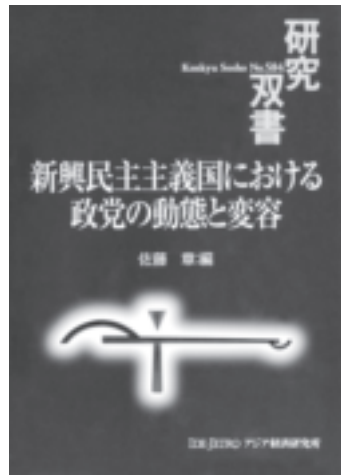


佐藤 章 編

## 『新興民主主義国における 政党の動態と変容』

研究双書 No. 584



本書は、二〇〇七年度から二年間わたってアジア経済研究所で実施された共同研究会「政治変動下の発展途上国の政党——地域横断的研究——」の最終成果である。

二〇世紀後半に発展途上地域では、脱植民地化、軍政・権威主義体制からの転換、冷戦終焉に伴う共産党一党支配の崩壊などの激しい変動が進展し、その帰結として、国民が広く政治参加し、複数の政党が競争する、代議制民主主義の制度をとる国家が数多く誕生（ないし復活）するに至った。それは同時に、「選挙に際して提示される公式のラベルによって同定され、（自由選挙か否かを問わず）選挙を通じて候補者を公職に就けさせるあらゆる政治集団」（サルトリ）としての政党が、グローバルな存在となる過程でもあった。

他方、この政党のグローバル化は、政党、政党政治、政党システムが、各国各様の展開を遂げる過程でもあつ

## 政党の動態と変容

た。これら政党をめぐる個別状況の理解は、それぞれの国に現出している民主主義のあり方を解明する際に核心的な重要性を持つ。この状況を踏まえ、本書

は、発展途上地域における民主主義国——質の評価はさておき複数政党による代議制民主主義の制度が導入されている国——を、アフリカ、中東、ラテンアメリカ、アジアから地域横断的に選り出し、最新動向に注目しながら、政党をめぐる個別状況の解明と分析に取り組んだ論文集である。

掲載論文は次の通りである。第一章「ポスト・アパルトヘイト期における南アフリカの連合政治——国民党／新国民党」解散をめぐる政治過程を中心として——」（遠藤真）と第二章「国民虹の連合（NARC）という経験——ケニア第二代大統領モイの引退と政党機能の変容——」（津田みわ）は、政党が事実上の崩壊を遂げていく過程を地域研究的な立場から再構成している。第三章「政党の合従連衡がもたら

す宗派対立の回避——戦後イラクの政党政治と権力闘争（二〇〇三年～二〇〇八年八月）——」（山尾大）と第四章「宗派主義制度が支配する政党間関係——不安定化するレバノン（二〇〇五年四月～二〇〇八年五月）——」（青山弘之）は、中東地域における多元性の重要な要素である宗派に着目し、宗派をめぐる制度化の度合いと政治情勢の関係を動態的に描き出している。

第五章「多民族権力分有体制下の党内抗争——統一マレー人国民組織（UMNO）の事例——」（中村正志）は、多元社会マレーシアにおける政権の安定性について、党内抗争のモデル化を通して考察している。第六章「民主化」後コート・ド'イヴ・オワールにおける民族と政党——「イヴ・オワール人」をめぐる各政党の対応から——」（佐藤章）は、民族と政党の関係を焦点を据え、「列柱」的な亀裂というイメージが妥当しない事例を紹介している。

第七章「ブラジルとアルゼンチンにおける政党政治の変容と民主主義——州レベルの「伝統政治」という視角からの考察——」（出岡直也）は、民主主義への移行と新自由主義改革という状況下で相次いだ、ラテンアメリカでの左派政権の誕生について、伝統政治の継続と脱却という分析的観点から考察を試みている。第八章「政党政治を乗り越える？——ラテンアメリカにおける「社会運動」の政治的潜在力とその限界——」（上谷直克）は、第七章と共通する時代状況の下で、先住民運動に立脚する社会運動の「政党化」現

象について、エクアドルとボリビアを比較対照しながら考察を加えている。いわゆる「第三の波」の「民主化」を経て、以前よりも多くの国家が民主主義の制度を採用するに至ったが、これは、民主主義という観点から比較対象として考慮されるべき国の飛躍的な増大を意味している。この状況は、理論研究に対しては、民主主義の包括的な比較という野心的な課題を提起すると同時に、対象国の数の多さという障害をも提示せずにはいない。他方、地域研究にとっては、新興民主主義国の経験を丹念に再構成するという有意義な研究課題を得た反面、地域事情の相違や理論的枠組みとの親和性の程度の差などから、広く学界に共有可能な形で対象国の独自性を提示することの難しさが倍加している。

政治研究を取り巻くこのような問題状況は、地域研究と政治学のあいだの密接な協働の重要性を指し示している。そのことを念頭に置いて、本書では、厳密な比較研究以前にまず、各事例国の持つ研究対象としての豊かな含意を具体的に浮き彫りにし、今後の研究につながる論点を抽出することを目指した。地域研究と政治学のあいだに「橋を架ける」という、かつして易しくはない試みに着手した、ささやかな挑戦の気概を読み取っていただければ、編者としては望外の幸せである。

（さとう あきら／アジア経済研究所アフリカ研究グループ）